及び家父長制下の婚姻からの解放が強く要求され—家父長権はすでに過去のものとなり、青年、ことに女性は自分の愛する相手と婚姻する権利、職業選擇の権利などの、法主体性の原則が成立されつゝあるのである。

解放という言葉の正しい意味で、中国革命に於ける女性の解放は何人も認めるであろう。併しもとより新中国は、解放後に社会主義的人間を造り出そうとする過渡期にあり、恋愛。結婚。家庭の問題で、幾多の女性が悲喜劇を起しているかは、新聞の投書欄にも数多く見られ、又戦後の日本女性の歩みと照しても頷ける所である。真に美しい社会主義的女性が誕生するのは、人民中国が、この嶮しく厳しい過渡期を斗い、勝ち抜いてからである。

（三一・八・二六・史学会会員）

# 佛教哲学における教育の原理（続）

疋田英肇

（承前）前号に於ては、日蓮聖人の所謂「主・師・親三徳」の指南に随つて、回・基・仏の世界三大宗教を判釈し、回教のアラーは「主徳」、基教のエホバは「主父両徳」を具すのに対して、仏教の如来は「主師親三徳」を具すが故に、回教のアラーが絶対主宰者であり、基教のエホバが創造者であると共に「天なる父」であるのに対して、仏教の如来は更に「教主・本師」という師徳を具備し、いはゞ教育主体的性格をその特質としてゐるから、仏教の教理が他宗教に比して著しく教育的であり、随つてその哲学が多分に教育の原理を包蔵してゐる事を論述して来たが、本号に於て更に詳論せんとするに当り、前号に引続いて、就中、

## （二）「エホバの主父兩德」について

一応論を進めて行きたい

前号に述べた、旧約「創世記」の二三例は、有名なエホバの対人宣告であるが、旧約聖書が示す歴史的記述の最初に示されるこの神の性格は、最もよくエホバ神の特性を顕はしてゐるのである。即ちエホバは決して単なる創造者ではなく、随つて又単なる絶対的支配者ではない、むしろ人間と同じ様な感情を持ち、人間らしい振舞いをする神であり、人間には親近感を持てる神である。これはエホバが元来イスラエルの民族神であつたといふ歴史的事実に由来するのであり、随つて本来祖神的な父徳を有する所の恩愛の神、授福の神、守護の神なる所以である。然るにその恩寵の神が、何故に前述の如く、人間の神に近づく事を拒否し、むしろ人民を呪咀し、嫉妬する神となつたのであろうか

創世記才六章に

「人、地の面に繁衍はじまりて女子之に生るゝに及べる時、神の子等人の女子の美しきを見て、その好む所の者を取りて妻となせり。エホバいひ玉いけるは『我靈永く人と争はじ、其は彼も肉なればなり、然れど彼の日は百二十年なるべし』」とあるに明らかなる如く、神の子孫達は実は神に背ける、不肖の民であつた。こゝに於て、神は、地上に人間を創つた事を大いに後悔するに至つたのである。

「是に於て、エホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂玉へり、エホバ言い玉いけるは、『我が創造りし人を我地の面より拭い去らん、人より獣、昆虫、天空の鳥にいたるまでほろぼさん、其は我之を造りしことを悔ゆればなり』と

我々はこゝに、不孝の子に対する父の激怒を見るであろう。しかもそれはあまりにも人間的な激情であつた。

この激情は、神が選民として生存せしめた、イスラエルの民に対してさえも同様であつた。否、更に一層激発して不良の子に対する父の怒りから、不貞の妻に対する夫の呪詛にさえ転じて行くのである。出エヂプト記や、ホセヤ書にはこれらの生々しい記述がある。

（續く）

## 編輯後記

十月十日の学長猊下米寿記念祝賀会開催の日まで間に合はせ様とした為に、編輯に日がなく、拙劣な結果を見るに到つた事は、学長猊下始め、諸師に対してまことに申し訳なくこゝに深くお詫び申上げる次第であります。特に、時日切迫の為、やむを得ず原稿の後半を割愛させて頂き、次号へ回して頂いた塩田先生には何とも申訳なき次第ですが、編者自身の原稿も次号に回した様な訳で、悪しからず御寛恕をお願する次第です。

（疋田虔記）

昭和卅一年十月九日　印刷
昭和卅一年十月十日　発行

編輯人　疋田英肇
発行人　松木興
印刷人　宮田如龍

印刷所　甲府市錦町　大宣堂印刷所

発行所　山梨県身延町　身延山短期大学